

「道路」から解放された新しい街を考えよう



座談会風景。左から、西村氏、堀部氏、小嶋氏、平田氏。／撮影：新建築社写真部

座談会参加者

小嶋一浩 (建築家 CAatパートナー
横浜国立大学建築都市スクールY-GSA教授)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所
京都造形芸術大学大学院教授)

平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所 東北大学特任准教授)

西村達志 (大和ハウス工業代表取締役専務執行役員)

第10回を迎えて

西村 今回で本コンペも第10回を数えます。過去9回では、その時どきで日本が抱える社会問題に提起するテーマをつくってきました。また大和ハウス工業自体も社会の要望に応えるべく、主軸であった住宅事業から医療・介護施設の建設やマンション事業、物流システムの構築など幅広く事業を手がけるようになりました。記念すべき第10回では新しい審査委員を迎えて、引き続き多様な視点から日本社会を見つめ、建築の可能性を引き出せるテーマをつくっていきたいと思います。よろしく願いいたします。

小嶋 前審査委員が掲げてきたテーマである社会性やリアリティ、地域社会の問題についてもつながりのある提案を求めたいと思います。完成度の高さよりも、次の世代が目指そうと思える提案に期待したい。何か問題を解決するというよりは、問題を発見してそれをどのくらい楽しめるかという視点で応募者がとらえてくれるとよいなと思っています。

堀部 環境、エネルギー、福祉など、さまざまな課題に建築は対応しなくては行けないのですが、若い設計者や学生にそのすべてを求めるのではなく、僕が若い世代に期待するのは「リリズム」です。自分の感情を表現してほしい。自分の身体から湧き出てくるエネルギーを見たいと思います。極端にいえば、たとえ提案としてバランスを欠いていて現実的でなくても、そこに僕は期待したいですね。

平田 僕が学生だった頃に比べると、建築とは何なのかが分かりにくくなっています。「個人」を考えるにも独立した「個」という概念そのものが変わってきている。そういう時代に何を考えるのかに僕は興味があって、単体の建築を超えた建築的思考に可能性があると思っています。それは、正面突破が難しい普遍的なテーマでもありますが、無謀なチャレンジをしているような提案も見たいです。

西村 私がいちばん懸念するのは、われわれが建築を目指して大学に入った時代に比べて、今どれだけの若い人たちが建築に希望を抱いて学ぼうとしているのかということです。このコンペを通じて、建築って面白いものだし、いろいろな可能性をもっているのだと感じてもらいたいですね。ですから、常識的な範囲の議論に留まらず、こんなことができるのではという提案を期待したいです。

建築を道路から解放する

小嶋 現実の社会では、さまざまな法規制に対応しながら敷地の中で建築を構築していかざるを得ません。ですからアイデアコンペでは、敷地の制約を気にせず、いつかこういうことが起こったらよいなと皆が共感するようなものを提案してほしいです。そうでないと制度も変わりません。単体での思考ではなく、敷地を超えた提案であることがとても重要だと思います。大学でも最近「Neighborhoods (地域社会・空間)」ということを考えていて、そのことについて興味深い建築家があります。フランスのラカトン&ヴァッサルは「ボワ・ル・プレートル高層住宅改修」(『a+u』1203)で、1960年代に建てられた低所得者向け集合住宅の各住戸に、サンルームとバルコニーの機能をもつ7×3.2mの中間域を設置して住環境を改善し、仮設(?)的にも見えるユニットの効果を政府に理解させて、同様なプロジェクトを広く展開しています。また、チリのエレメンタルは「キンタ・モンロイの集合住宅」(『a+u』1102)で将来的な増築にも対応できる、間口と同じ余白をもって隣り合うユニットをローコストでつくり出し、さらに増築の仕方までちゃんとワークショップで教えています。「キンタ・モンロイ」に端を発し広く中南米に広がって、さらにはロシアから東南アジアまで世界中から引き合いがあるそうです。日本では法制度から「こんなものダメだ」と一蹴されるのですが、東日本大震災の津波被災エリアなどでも展開できたらどんなによいか。そうした発想は、敷地の中で建築を美しくつくるだけではなく、社会の資源を見つけ出してそれをどこまで面白がって使えるか、からきています。このコンペでも皆がそうした資源を分析的に考えてほしいですね。

堀部 敷地を超えて考えるということは大切だと思います。もうひとつ紐解くと日本の敷地は「道路」から決まっているといえます。建蔽率や防火の問題など、建築を建てる敷地は実は道路が基になっている。そこをもう一度再考察できるとよいのではないのでしょうか。たとえばヨーロッパの旧市街に行くと、幅員2mくらいの道沿いに高層の建物が建っていてそれが魅力的だったりします。道路を挟んで向かいの住民と住民がコミュニケーションを取っている。陽は当たらないし、日本では地震のことを考えると問題がありますが、でも多くの人がそうした旧市街に魅力を感じています。もう一度道

路と敷地の関係を見直して、「道路がこんな風になると敷地の条件も変わって、こんなに魅力的になるんだ」と気付けるような問いかけを試みる可能性はあると思います。常識として受け入れている道路をもう一度疑ってみる。

平田 確かに実際に設計を始めると、常識とされることに疑いをもったとしてもその不自由さを受け入れざるを得ません。

その前になぜこういうことになっているのか、疑問を抱く気持ちは大切ですね。それは建築の問題を超えて、政治や歴史の問題などを巻き込み始めて、その人の生き方にも関係してくるかもしれません。そこに触れてしまうのは危険だと、そこに踏み込まない方がうまく生きていけるという感覚が皆の間に霧のように広がっていて、閉塞感を感じます。建築の問題を自分が生きていくうえでの切実な問題としてとらえていない。建築に諦めを感じている人が増えているのではないかと思います。道路の話はまさにそうですが、「なぜ自分たちはこういう仕組みの中で設計しているのか」と疑うのは面白いと思います。ただ、ものすごく高所からやろうとすると行き詰まるので、自分はこういうのは嫌だ、こういうのは面白い、と思うところから始めないと突き抜けられない気がします。

西村 確かに常識的にまともになってしまうのは、既存概念の範囲に納まるものをつくろうとするからです。素直にこんなものをつくりたい、こんなものができたら面白い、というものを提案してほしいですし、それだけで終わらずに、さまざまな規制も含めた常識の壁を超えるためには何ができるのか、というアイデアを求めたいです。ここを変えれば建築が変わるんだ、ということが分かれば、若い人たちの力になる気がします。

小嶋 つまり、「建築は道路の奴隷ではない、建築を道路から解放する」ということですね。非常にクリティカルな問題としては先日ニュースに出ましたが、政府は2020年までに東京の木密市街地を改善すると宣言しました。木密市街地は幅員4m以下の狭い道路が入り組んでいて、未接道敷地もたくさんあります。つまり道路の奴隷になっていないから危ないと言われているんです。だからといって現状の法規に則った道路で木密エリアを全部更新したら、安全にはなってもすごくつまらない東京ができてしまいます。道路を疑ってみるのはすごく面白いと思います。

「道路」と「道」

平田 道の問題には僕も興味があって、集合住宅を設計する時に道から考えたりもします。そもそも「道路」と「道」の違いにも言及すべきでしょうね。道路は車などの移動手段と一緒にとらえられているので、それが街区を規定し、さらに街区の中で敷地割りが発生する状況が生まれています。すでに区画されている敷地から選んでくるのではなく、敷地から掘り起こしてくるような提案がよいですね。



堀部 「景観を考える」というテーマを「風景を考える」という言い方にする視点が変わると変わります。それと同じように「道路」を「道」に置き換えたなら建築はどうか、ということでもよいかもしれません。「道」になったときに、建築が道を中心にどういう世界を切り拓けるのか。

西村 「道」というと道そのものだけではなく、周囲の建物やその内部の機能も含めた話になる可能性があって、発想が豊かになってくる気がします。

小嶋 道路が王様ではない、という状況を前提とした提案をしてもらうためには、「n棟の建築とその隙間」のような道路からの解放を考えてもらうことに近いのかなと思います。

堀部 僕もそう思います。思い切って「道路のない街」といい切ると、広場の連続が自然と道路の機能をもつ街になるのではないのでしょうか。道路がなくなると、より道を考えざるを得なくなるというか。道路って一体何だろう、と現実をもう一度見つめ直す。

小嶋 山本理顕さんの地域社会圏のような案が出てきたら、それは「道路のない街」になりますね。

堀部 それもありですね。たとえば東京ディズニーランドには段差もありませんし、車もきません。サービスの通路が地下に入ってますから、いわゆる道はありません。道の機能のある広場の連続というのでしょうか。そういうことをもっと別なかたちで掘り起こせないかと思います。段差がないというのはこういうことなんだとか。

平田 「道路からの解放」という言い方もできますが、「道を解き放つ」ともいえますね。道のあり様が解放されれば、建築も道路にまつわる制度的制約から解放される。対立項で見えてしまうより原点に戻るような視点で見たいですね。

堀部 たとえば、車と道路は関係ないと定義して、車が通らなくなったら考えられることを提案してもらうのも面白いかもしれない。車が通らなければ、ものすごいヘアピンカーブでも、幅1mの道でもよいわけです。もう一度原始に戻るイメージです。

小嶋 僕も大学で土木の人たちと一緒に、モビリティの研究を始めています。たとえばバルセロナでは、自転車のシェアリングを7年くらい続けていて、車道をつぶして自転車ゾーンをどんどん増やしています。そういう面白いことが世界ではたくさん起きています。今のところ建築家は自分たちとは関係ない話としか思っていないんですが、そうした社会的なリソースと建築が結び付けば、面白いことが起こり得るのです。

この研究で見ている「道」は建築基準法の根拠となっている「道路」ではなくて、「道と移動って何なんだろう？」ということです。車がなくなると、自転車か、歩かなくてはならないので、拡散している街よりも近接する街の方が当然便利です。そうやって大抵のダウンタウンはウォークアビリティで決まっているのです。

平田 僕はいくつかの大学で、エレベータのない新しいモビリティを前提とした超



高層をつくる課題を出したことがあります。すると、まったく今までと違う方法で上まで行けるようになるので、建物内の関係性が全部変わってくるのです。それが街のレベルになるともっとさまざまな関係性が変わることになる。パーソナルモビリティなどいろいろなモビリティが研究されている中で、建築との関係も絡めた提案が入ってくる余地があるとよいと思います。

窓から見える街の景色

小嶋 「道路と街」をテーマにすると、建築の問題ではないことを問いかけていると勘違いされる可能性があります。内部を含む建築も考えてもらいたいので、道路と街の提案と共に、その中のひとつの建築の具体的な設計も求めるとよいかもしれません。

堀部 あるいは、道路と街の提案と、その中のひとつの建築の部屋から見える風景を描いてもらうのはどうでしょうか。道路がないことによってその街がどのような関係で成り立っているのかを表現してもらおう。もしかすると、われわれが思ってもみないような景色が展開されるかもしれません。

小嶋 それはよいですね。窓の外を描く。

西村 今までそういう表現方法を求めたことはなかったですね。先ほど「建築と隙間」という言葉がありましたが、中から見る外側の景色では隙間を重視する必要があると思います。そういうことが伝わる気がします。

小嶋 「道を解き放つ」のであればオフィス街でも住宅街でも成り立ちます。設計する建築の機能についてはまだ設定していませんね。

西村 ダイワハウスが主催だからといって、住宅の提案である必要はありません。このコンペの本来の趣旨は若い建築家や学生の支援ですから、自由な発想を期待しています。

小嶋 大枠は決まってきましたね。あとはタイトルです。

堀部 「道なき街のひとつの窓」はどうですか？

平田 窓から見える景色を表現してもらおうのはすごくよいと思います。ただ「窓」がタイトルに入るとそれ自体が深いテーマになってしまいそうな気がします。

小嶋 確かに窓自体のデザインがテーマになってしまうと意図と違ってしまいます。窓から見えるものが重要なことから、提案する街の現れ方を窓を通して描いてもらいましょう。

堀部 簡単に親しみやすい言葉だと、応募する人にとって街の見方や考え方が変わると思います。街を歩いている時、ずっと頭の中にぼんやりとテーマの言葉が残っている。そういう感覚を伝えたい気持ちがあります。

西村 ここでいう道は、いわゆる建築基準法の根拠となる道路のことですね。言いやすさを考えると「道路」より「道」といった方がよいのは分かりま

すが、課題文の中では「道」や「道路」の意味を明記しておいた方がよいでしょう。混乱を招くようなら「道路」とするのがよいかもしれません。

平田 道が先にできて家ができていいのか、家ができてそこに道ができるのか。順序が分からないような状態を考えることがテーマなので、むしろ「始まり」のような、元を辿ることを想起させる言葉でもよい気がします。

堀部 今までは道路ありきだったから、これからは建物、あるいは生活ありきだと。そこから自然にできたのが道、人と人が行き来するところであるということですね。

平田 「道の生まれる街」はどうですか。街のあり様から道が生まれるという、原点に戻っている感じがあると思います。

西村 よいですね。人の営みが見えてくる臨場感も含まれた言葉です。

提案に期待すること

小嶋 「道」は径路の「径」はどうでしょうか。僕の感覚だと「径路化する」ことは建築的に重要なテーマで、脈絡や径路についてはいつも考えています。必ずしも移動だけではありませんが。径路化されていくことと、それを窓から見るという関係もぴったりくるように思います。「径の生まれる街」はどうでしょうか。

課題としては、まず敷地は架空でもリアルでもよいとします。砂漠のような何も無い場所より、生産的な動きのある場所の方がよいでしょう。そして、数戸でも100戸でも、規模もその機能も自由としましょう。住宅や集合住宅でも、店舗やオフィスでもそれ以外でもよいとします。既成の常識ととらえている「道路」から解放された街と径の関係の提案を求めます。建築の集合の仕方が分かる絵を描いてほしい。そして、その街の中の1戸あるいは1棟から見える風景を、提出物の中に描くことも条件とします。

堀部 「径」には個人の思いや感情も読み取れますね。よいと思います。僕は最初にリリズムで向き合っていたのですが、とにかく自分が住みたい街をつくってほしいと思います。若い人たちが本当はどんな街に住みたいのか、それが伝わればよいのです。「径」を再考することから、自分の住みたい街を愚直に表現してもらいたいと思います。

平田 「径」には物が動いた時の痕跡として見えてくるもの、という意味合いも感じられますね。僕は必ずしも今周りにある環境に縛られる必要はないと思いますが、まったく無視してしまうのではなく、何かそこに潜在している可能性を掘り起こすような提案を期待したいと思います。

西村 これからの建築や街を考える上で、発想を膨らませてくれる課題だと思います。「道路」という常識から解放された提案を待っています。

(2014年5月2日、大和ハウス工業東京本社にて 文責：本誌編集部)

